

ウラジーミル・ナボコフ *Lolita* におけるロリータ

市川昭子*

*昭和薬科大学非常勤講師

Lolita in Vladimir Nabokov's *Lolita*

Akiko ICHIKAWA*

*Part-time Lecturer, Showa Pharmaceutical University

要 旨

ウラジーミル・ナボコフの小説 *Lolita* (1955) において、ハンバートがロリータに与える属性「ニンフェット」はナショナル・イメージとして一旦は規定しうるものの、小説プロットでそのイメージは容易に増殖し、あるいはリアリティとの乖離から瓦解する。その契機となるのはナボコフがテキスト上で行う精神分析言説への抵抗であり、それはまた、おそらくナボコフが提示する、規範についての問いである。

キーワード

ウラジーミル・ナボコフ、ニンフェット、冷戦期アメリカ、モダニズム、政治的および文化的読解

I. はじめに

*Lolita*の本文は主人公ハンバート・ハンバートの獄中記の体裁で書かれており、二部から成る。Part Oneで中年のヨーロッパ人男性で、フランス文学者の語り手ハンバート・ハンバートは未亡人シャーロット・ヘイズという女性と結婚する。彼の本当の欲望の対象がシャーロットの12歳の娘ドロレス・ヘイズだったという事実を妻に知られてしまうが、シャーロットはその直後、偶然起きた自動車事故で死亡する。ハンバートはドロレスを車に乗せてアメリカ中をさまよう旅に出る。Part Twoで彼は母を失い、自分のほかに頼る先のないドロレスを手に入れるが、実はその間ドロレスを追っていた別の謎の男に彼女を奪われ、ハンバートはその男を探し出して銃殺した罪で拘留中、冠状動脈瘤で死亡する。

このあらすじからわかるように、ハンバートの罪状は女兒の誘拐および性的虐待ではなく、殺人である。しかし、この作品は殺人以上に児童の性的虐待へ焦点を当てており、批評もそれに従ってきた。*Lolita*は1950年には書きあげられ、フランスのオリミア・プレスで1955年に、アメリカでは1958年に出版されたが、その後イギリスとフランスでは猥雑な小説として扱われた。また作者ナボコフ自身の翻訳によるロシア語版『ロリータ』がアメリカで出版されたのは1967年、ロシアでは東西冷戦終結時期の1989年である。

毛利公美（2008）によれば、ロシア語版はロシアで出版される以前からブレジネフ政権下の闇市場で高値をつけていたが、公式には『ロリータ』は不埒な小説を書く亡命作家の作品として批判の対象となっていたという。

出版当時からその評価は大きく二分する。イギリスではロンドンの*Sunday Express*の編集者ジョン・ゴードンが*Lolita*を“the filthiest book I have ever read. Sheer unrestrained pornography” (qtd. in Schiff 866) と評し、図書館の蔵書から*Lolita*が除外された。しかしアメリカの批評家ライオネル・トリリングは1958年、この問題作を、情熱的な愛についての小説とする。“*Lolita* is about love ... not about sex, but about love. Almost every page sets forth some explicit erotic emotion or some overt erotic action and still it is not about sex. It is about love. This makes it unique in my experience of contemporary novels” (qtd. in Kauffman 57). トリリングは、*Lolita*における婚姻関係にとらわれない情熱的な愛を、西洋社会のモラル状況を反映させて描いた小説として評価した (Schiff 870)。

*Lolita*を美学的に読むトリリングに対し、リンダ・カウフマン (Linda Kauffman) は “[I]terature as social change or aesthetic bliss” (58) という対立項を立て、*Lolita*を政治的に解釈する。フェミニスト・マテリアリストの立場から、カウフマンは語り手の一方的な声が虐待の標的である少女を隠蔽する小説であると主張する。しかしハンバートが欲望するのはセックスの対象としてのロリータであるとはいきれない。本論は、むしろこの義理の親子関係と異性愛関係をつうじて「ロリータ」を規定するこの小説自体が、美学的読解と政治的読解との対立を疑問に付していることを考察する。

II. ロリータの場所

*Lolita*の本文はハンバートの獄中記の体裁をとっているが、これには架空の精神科医ジョン・レイ・ジュニア博士の序文がつけられている。レイ博士はハンバートを “No doubt, he is horrible, he is abject, he is a shining example of moral leprosy, a mixture of ferocity and jocularly that betrays supreme misery perhaps, is not conducive to attractiveness. ... He is abnormal. He is not a gentleman.” (5) と評し、すでに死亡しているハンバートを非難している。実際に、その後続く「小説」が異常者によるものであると保証しているのはこのレイ博士のことばであることに、読者はまず気づく。同時に、レイ博士の言葉は、序文の書き手と読者とのあいだに「自分たちは異常ではない」という了解を暗黙のうちにとっている。

常軌を逸しているとされるハンバートは、ノーマン・メイラーが1957年に “White Negro” を論じ、社会的アウトサイダーをヒップスターとして称揚するようには、明示的にヒロイックなキャラクターではない。ナボコフは「四角四面」な「常識」を批判するが、彼の論では「常識」が「逸脱者」とみなす標的は可変的だ。「世界中のどこの部屋にだって、歴史的な時間空間のある特定の微妙な時点、場所で、あの時あそこで、今ここで、正義とやらいう怒りにかられた常識的大多数のために死に追いやられないような人は、ただの一人もいないということを考えてみるのは有益なことである。信仰、ネクタイ、目、思想、風俗、言語の色合いの違いは、いつかどこかで必ずやその独特の色合いを憎む大衆の致命的な反逆に出会うだろう。才能があればあるだけ、普通とは違っていればいるだけ、その人は礫台の近くにいるのである」 (ナボコフ470-1)。

カウフマンはこの作品の「法言語を使って陪審員へ直接語りかける、前例と事例の寄せ集め」 (54) といった特徴を、*Heloise*から*Clarissa*, *Jane Eyre*, *Turn of the Screw*, そして*Absalom, Absalom!*へ至る “trial motif” と彼女が呼ぶ系譜に置く。ハンバートは

“you can count on a murderer for a fancy prose style” と罪を認めてはいるが、彼が独白で行っているのはロリータの声をハンバートの言葉で覆い隠していることだとカウフマンは指摘する。

Manual to manuscripts, authorities and authors ranging from St. Augustine to Judge Woolsey are cited, but there seems to be an inverse relationship between writing and wisdom, as if the more specialized our language becomes, the less we perceive. That is especially true of Humbert's perception of Lolita: from beginning to end, she remains an enigma to him. For her, the rest is silence. (54)

作品を見れば、ハンバートがロリータの顔を思い出せないこと (“my own desire for her blinds me when she is near” (44))、事件の容疑内容である殺人に重点を置くことなく、容疑者自身の過去についても数章で済ませているにもかかわらず、ロリータやその他の子供たちとの経験を、事細かにかつ明確に陪審員に伝えようとするテキストそのもの (“do not skip these essential pages!” (129))、冒頭およびその他で、ハンバートがドロレスに使う「ロリータ」の呼称をひたすら転がし続ける箇所（冒頭は次のように始まる。“Lolita, light of my life, fire of my loins. My sin, my soul. Lo-lee-ta: the tip of the tongue taking a trip of three steps down the palate to tap, at three, on the teeth. Lo. Lee. Ta.” (9) また、手記執筆途中で体調不良を訴える Part One 26章では、Lolitaの名が9回繰り返され、“Repeat till the page is full, printer.” (109) と締めくくられる）は、ハンバートがロリータを言葉のみでとらえている傾向があることを物語る。

Ⅲ. ロリータを規定するもの

Lolita がアメリカで出版された1955年はR. W. B. ルイス著 *American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century* の出版をみた年でもある。ルイスは19世紀アメリカで「新しいアメリカの風景」が「ラディカルに新しいパーソナリティ、新たな冒険のヒーローのイメージ」を帯びたと論じている。“[A]n individual emancipated from history ... Adam was the first, the archetypal, man. His moral position was prior to experience, and in his very newness he was fundamentally innocent.” (5) この“innocence”のヴィジョンが20世紀半ばにも、道徳的、芸術的な可能性を試すために必要であり、新たな「アメリカ」像が求められるとルイスは論じている。東西冷戦期に共産主義対資本主義の図式が全体主義対自由主義の対立と読みかえられたなか、マッカーシズムと同時に過去にとらわれない自由が称揚され、イデオロギー無きイデオロギーが行き渡るかのような風潮に対する反応である。ルイスが同時代に見たイノセンスは、過去をもたないところのなさとして、ハンバートの語るロリータ像に半ば投影されている。

ロリータの保護者でありレイピストでもあるハンバートの語りは、幾重にもロリータを位置付ける。すでに仮名である「ドロレス・ヘイズ」を「ニンフェット」と称し、かつ「ロリータ」と名付ける例に代表されるだけではない¹⁾。小説プロット上に現れるのは、子供をとりまく大人たちの言説がアメリカ社会を構築し、そこに付随する、思春期を迎えた少女ロリータへの欲望を通じて並べられる、さまざまな言説である。小説の前半部分で示されているのは、ロリータについて言えば、繰り返し触れられている子供に関する知識がアメリカ社会でしか機能しないということだ。

ロリータには、ハンバートによって出会った当初からニンフェットという属性を与えられている。ニンフェットの定義は以下のようなものである。

Between the age limits of nine and fourteen there occur maidens who, to certain bewitched travelers, twice or many times older than they, reveal their true nature which is not human, but nymphic (that is, demoniac); and these chosen creatures I propose to designate as “nymphets. . . .” [C]oevals of hers . . . are incomparably more on that intangible island of entranced time where Lolita plays with her likes.” (16-17)

ハンバートは少年期の恋人アナベルと過ごした時間を忘れられないまま、中年になってニンフェットを探し求める。パリで出会うモニクは自称18歳の娼婦だ。“[S]he had been a nymphet all right!” とのハンバートの回想から、すでにニンフェットの域を超えていたことがわかる。その後の結婚相手ヴァレリアも20代と推測される。物語として、モニクは消費の対象としてのロリータ、または小遣いを要求するロリータを暗示し、また離婚することになるヴァレリアの例はロリータとの関係の顛末と呼応している。しかしここで注意すべきは、ハンバートがパリで持ったこれらの異性関係とロリータとの関係の違いは、その異性関係が別の仕方で構築されていること、つまりハンバートのロリータとの関係が親子関係として成り立っていることだ。ロリータとのような義理の親子関係において行使できる権利は、買売春や婚姻関係でのそれとは一致しない。加えて、保護者／被保護者の関係において子供への権利を行使するには、子供を語る知識が必要となる。

小説ではそのような関係を築くことができる子供は、アメリカにのみ存在している。極寒のカナダに身を置くと、ハンバートは自分自身からかけ離れていく自分を感じてしまう。

We lived in prefabricated timber cabins amid a Pre-Cambrian world of granite. We had heaps of supplies – the *Reader’s Digest*, an ice cream mixer, chemical toilets, paper caps for Christmas. My health improved wonderfully in spite or because of all the fantastic blankness and boredom. Surrounded by such dejected pose, cleansed by a whistling gale; seated on a boulder under a completely translucent sky (through which, however, nothing of importance showed), I felt curiously aloof from my own self. (33)

カナダには、合衆国におけるのと同じくでも身の回りにあふれる雑多なものが備蓄されているが、カナダは自然環境があまりにも合衆国とかけ離れており、ハンバートはニンフェットの存在さえも見つけることができない。“No temptations maddened me. The plump, glossy little Eskimo girls with their fish smell, hideous raven hair and guinea pig faces, evoked even less desire in me than Dr. Johnson had. Nymphets do not occur in polar regions” (33). しかし、子供のいる場所にニンフェットがいないのは、単に国境を越えたからだと理由づけることはできない。先に触れたように、ハンバートはパリでもニンフェットに出会えたはずだが、ニンフェットの探求は金をまきあげられるという結果に終わる。ハンバートが接触し得たニンフェットは、アメリカに住む、保護者のあ

る子供ということになる²。

ウォルター・ベン・マイケルズ (Walter Benn Michaels) は、20年代のアメリカのモダニズムは人種的差異を文化的差異へ翻訳することを可能にした形式であると論じている。文化的差異への翻訳は「私がこの文化に属するのはその文化が他よりも優れているのではなく、それが私の文化だからだ」というレトリックが生じる契機、また言語の自律性が生じる契機である。「ニンフェット」という属性についていえば、ハンバートが不特定の子供たちをニンフェットと呼ぶことから、ロリータだけがニンフェットであるわけではない。また「ロリータ」という呼称は、ドロレスの単なる言い換えではない。カウフマンのように言い換えれば、ロリータの描写はほとんどがドロレス個人を表現しない。ハンバートが執拗に語るニンフェット・ロリータの描写はハンバートの言葉によるものというよりもむしろ、消費文化からの引用の寄せ集めから成り立っている。

What drives me insane is the twofold nature of this nymphet - of every nymphet, perhaps; this mixture in my *Lolita* of tender dreamy childishness and a kind of eerie vulgarity, stemming from the snub-nosed cuteness of ads and magazine pictures, from the blurry pinkness of adolescent maidservants in the Old Country, . . . and from very young harlots disguised as children in provincial brothels. . . . (44)

ジェイムズ・キンケイドは *Erotic Innocence: the Culture of Child Molesting* で、子供がアメリカの消費文化の興隆によって永続性を持つ概念を自在に書き込める存在として構築されていることを説明している。子供に書き込まれたとらえどころのない魅力は、それ自体では語りえない。小説後半が特に示すように、ハンバートが自分の中に持っているロリータ熱がほかの男のもとへ逃げ去るドロレスの行動を見逃していることは、逆に言えばドロレスに与えられた書き込み可能な名が「ロリータ」であることを示している。ハンバートは別の箇所でも、睡眠中の夢を次のように告白する。“My world was split. I was aware of not one but two sexes, neither of which was mine; both would be termed female by anatomist” (18)。ニンフェットには、性別を問わない無垢な子供ではなく、気を狂わせる存在、性別をもった子供、“tender dreamy childishness” と “a kind of eerie vulgarity” の混淆という属性が書き込まれている。

ドロレスを不可視化するロリータの名と同様に、語り手ハンバート自身も読者の読解に抵抗している。アナベルと過ごした時代にしばしば立ち返る無時間的な語り、ハンバートの自意識の過剰さは、彼を知りたいと望む読者、そしてレイ博士に代表される精神分析の言説に抵抗する。小説のテキストはあからさまに精神分析的解釈の余地を与えることを拒んでいる。カナダから戻るとハンバートは精神病を患い入院するが、治療によってではなく精神科医をからかうことで健康を取り戻す。精神分析医の「商売を知り尽くしているのを決して悟られないこと」(61) がそのルールの一つにあげられているのだが、相手の言語を操るハンバートの旺盛な知識は、ドロレスの父親を演じるとき、ロリータとの愛憎関係を語る材料となる。

ロリータの場合もハンバートの場合も、こうした理解への抵抗は対象への知のあり方が容易に変容することと関係している。Part Oneでハンバートは歴史上の年齢の離れた異性関係について、持ちうる限りの情報を披歴する。イギリス、アメリカにおける子供の定義、ヨシユアの売春婦が10歳であったという議論、ウェルギリウスの少年趣味、イクナートンの裸の娘たち、東インドの田舎では思春期前の少女と80歳の男性の婚姻など

が珍しくないこと、ダンテが9歳のベアトリーチェと結婚したこと、ペトラルカが12歳のローリーンに恋したこと(19)。これらの、古代から蓄積された一連のデータは、ハンバート自身を擁護する盾として語られているのだが、同時に、しばしば物語に共鳴するこれらの事例は、それらが冷戦期管理社会のフィルターを通して「児童への性的虐待」と翻訳されることを示している。すでに述べたように、この「児童への性的虐待」のモラルの問いに注意を向けさせるのは、小説の内容ではなく小説の序文である。レイ博士の序文は、ハンバートの独白をうけて“had our demanded diarist gone ... to a competent psychopathologist, there would have been no disaster”(5)と逸脱した人格の持ち主と呼ぶ人物に対する読者の立ち位置を切り出している。

ハンバートの立場がアメリカの背景に馴染まないのは、レイから読者が受け取る情報や、彼がヨーロッパ出身であるという設定だけが理由ではない。ハンバートの他者に対する視線もまた、対象への知の流動性を示している。Part Oneではドロレスの母シャーロットを前にして、それまでかかわった女性たち(シャーロット、リタ、ヴァレリア)について逐一互いを比較し、その扱い方を心得ていると自認するものの、その自負もシャーロットを前にして有効ではなくなる(83-84)。またハンバートは同業者を頼んで、同性愛者ゴダンを利用し、ロリータをビアズレー女学校へ入れ、定まった住処に落ち着く。

I would have hardly alluded to him at all had not his Beardsley existence had such a queer bearing on my case. I need him for mediocre teacher, a worthless scholar, a glum repulsive fat old invert, highly contemptuous of the American way of life, triumphantly ignorant of the English language – there he was in priggish New England, crooned over by the old and caressed by the young – oh, having a grand time and fooling everybody; and here was I. (183)

ゴダンとの再会は、旅の出費に窮したハンバートが、自分の仕事をゴダンが評価した経緯、つまり二人は同業者としてのつながりがあったことを思い出したことによるのだが、ハンバートがアメリカ社会で規範を逸脱した人物につけこむ構造は (“[D]espite his colorless mind and dim memory, he was perhaps aware that I knew more about him than the burghers of Beardsley did”(181))、「思い出す」という偶然から生まれている。語りの言語は、対象だけでなく語り手自身をも不可視化する。

IV. パロディとしての*Lolita*

アメリカでの出版に先立って*Anchor Review*に書かれた“On a book Entitled *Lolita*”は、現在では小説のあとがきに位置づけられている。この文章で、ナボコフはこの小説を自身がアメリカの作家になるために書いたものだと述べ、*Lolita*を反アメリカ的だとする指摘を受けたことに言及して以下のように書く。

Nothing is more exhilarating than philistine vulgarity. . . . I chose American motels instead of Swiss hotels or English inns only because I am trying to be an American writer and claim only the same rights that other American writers enjoy. . . . [A]ll my Russian readers know that my old worlds – Russian, British, German, French – are just as fantastic and personal as my new world is. (315)

ロシア、ヨーロッパおよびアメリカを“fantastic and personal” ととらえ、同時に自らをアメリカに身を置く作家とすることに意識的であること。これが、英語で書くアメリカの作家になるということはどのようなことかという問いを促し、東西冷戦イデオロギーの対立構造のもとで作家自身のあり方を思考させている。ナボコフは同じ文章の中で、自身がロシア語を放棄せざるを得ず、他方で英語の母語話者が「伝統を魔法のように飛び越える」ための道具をもたないことに意識的だ。

None of my American friends have read my Russian books and thus every appraisal on the strength of my English ones is bound to be out of focus. My private tragedy, which cannot, and indeed should not, be anybody's concern, is that I had to abandon my natural idiom, my untrammelled, and infinitely docile Russian tongue for a second-rate brand of English, devoid of any of those apparatuses – the baffling mirror, the black velvet backdrop, the implied associations and traditions – which the native illusionist, frac-tails flying, can magically use to transcend the heritage in his own way. (317)

国家への帰属意識よりも言語に意識的である彼の言は、この点でハンバートを思い起こさせさえする。冷戦下のアメリカで書く亡命作家としてのアイデンティティを思考することは、作品中に取り上げられるあらゆる資料、データ、そして複数言語を自在に使用することをナボコフに可能にしている。

1920年代のアメリカをモダニティ興隆時期ととらえる文化史家のイーライ・ザレツキー (Eli Zaletsky) は、精神分析がフォーディズムに合理性の徹底というユートピア的ヴィジョンをもたらし、モダニティの興隆とともに主体を俗化し、大衆化したと論じる。女性はそれまでの家族の重みから解放され、家族はセクシャリティと個人の親密さの場に変容した。精神分析は、同性愛者にも女性と同じ理由から、つまり再生産の責任から解放されたという理由から受け入れられた (157)。“[S]exuality must be understood as part of that mode of production” とはジュディス・バトラー (Judith Butler 1998) の言である。バトラーはナンシー・フレイザー (Nancy Fraser) のホモセクシャルは承認を必要とするという主張は、セクシャリティそのものを文化的承認として経済的承認から切り離していると指摘したうえで、ホモセクシュアリティは文化的承認を得るだけではなく、むしろヘテロセクシャルを規定してきた生産様式と不可分であると論じる (41-44)。「セクシャリティの複数の形態がヘテロセクシャルな関係性とその再生産を混乱に陥れると論じることは、人や性を規定するものがいかにラディカルに変容しうるかという議論でもある、それは文化的な議論ではなく、主体の生産様式として性を規定する場を確認する議論である」(44)。

精神分析がフォーディズムの発達とともに主体を生産様式から疎外し、大衆文化を享受させるに至ったことを念頭に置いて読むと、ランチエ (不労所得者) であるハンバートの手記は、精神分析の介入を拒み、規範への回収を容認しないテキストである。あるいは、その徹底がどの時代にも不可能であることを示すテキストであろうとしている。カウフマンは “[a]s parody, . . . the forward acts as an injunction against the kind of reading that foregrounds social issues like child abuse” (58) と、“bundle of relations of between men” (63) を演じるレイ博士の序文を批判するが、そのパロディの意味をとらえ直し、この序文つきの小説テキストを社会を直接語る小説ではなく、社会を模したパロ

ディと読むのであれば、そのパフォーマティヴィティが見えてくる。バトラーの言を借りれば、パロディは自らを喜んで公に晒し、相手の立ち位置をも占領する (35)。小説のテキストは、消費文化に囲まれて育つ気まぐれなドロレス、他の男のもとへ去って行くドロレス、声の聞こえないところにまで覆い隠されるドロレス、序文で死んだと報告されるドロレス (Nabokov 5) との乖離にもかかわらず、ロリータに向かって語り続ける。

V. 結語

*Lolita*に現れる力の関係は、その文化的覇権の枠を超えたときには機能しない。ナボコフが英語の母語話者に認める魔法は、その言語で過去を自在に参照し、過去と現在を隔てる黒幕の向こうに無時間的な記憶を操ることで奥行きを演出する魔法である。そこにはどんな世界が見え隠れするか？バトラーが2004年、個人に還元されることのない政治的な「集団的規範」を思考するように、あるいはカウフマンが論じているように、*Lolita*は文化左翼のそれへとシフトした左翼批評が冷戦以後に辿った経緯に対する、モダニストの応答でもありつづける。

注

- 1 武村知子は、スペインの地を訪れた若い学生とロリータという名の少女の物語を描いたハインツ・フォン・リヒベルクの短編「ロリータ」(1916年)とナボコフの『ロリータ』の比較研究 (Michael Maar, *Lolita und der deutsche Leutnant* (Suhrkamp, 2005)) を紹介している (27)。
- 2 「ロリータの父親ハロルド・ヘイズがアイルランド系であることは、いくつか証拠が作中にあるが、母親シャーロットの出自…について、ナボコフは個のあとがきをロシア語に訳した際に、「純粋なフランス人の代わりに、ドイツとアイルランドの血の混合にもかかわらず」という興味深いつけたしを行っている。作者のこの言によれば、シャーロットはドイツ系の移民ということになる」(秋草183-4)。

参考文献

- 秋草俊一郎『ナボコフ 訳すのは私——自己翻訳がひらくテキスト』東京大学出版会、2011年。
- Butler, Judith. “Merely Cultural.” *New Left Review* 1/227, January-February 1998, pp. 33-44.
- . *Undoing Gender*. New York and London: Routledge, 2004.
- Fraser, Nancy. *Justice Interruptus: Critical Reflections on the “Postsocialist” Conditions*. London: Routledge, 1997.
- Kauffman, Linda S. “Framing Lolita: Is There a Woman in the Text?” *Special Delivery: Epistolary Modes in Modern Fiction*. Chicago: U of Chicago, 1992, pp.53-79.
- Kincaid, James R. *Erotic Innocence: the Culture of Child Molesting*. Durham: Duke UP, 1998.
- 毛利公美「里帰りしたロリータと子供たち：ソ連、ロシアにおける『ロリータ』の受容と変容」『英語青年』2008年4月、pp.19-22.
- ナボコフ、ウラジーミル『ヨーロッパ文学講義』野島秀勝訳、TBSブリタニカ、1982年。

- Nabokov, Vladimir. *The Annotated Lolita*. ed. Alfred Appel, Jr. New York: Vintage, 1991.
- Lewis, R.W.B. *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century*. Chicago: U of Chicago, 1955.
- Michaels, Walter Benn. *Our America: nativism, Modernism, and Pluralism*. Durham and London: Duke UP, 2007.
- Schiff, Stephen. "Nabokov's *Lolita*." *A New Literary History of America*. ed. Greil Marcus and Werner Sollors. Cambridge, Massachusetts and London: Harvard UP, 2009, 866-871.
- 武村知子 「もうひとつの「ロリータ」——幻想の行方」『英語青年』2008年4月、p.27.
- Zaletsky, Eli. *Secrets of the Soul: A Social and Cultural History of Psychoanalysis*. New York: Vintage, 2005.